

園芸文化研究所助成研究報告

(プロジェクト研究の部)

19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究

「ジークルの庭様式についての予備的な考察」

新妻昭夫(人間環境学科)

昨年度は初年度ということもあり、RHS(王立園芸協会)の図書室などでの資料探しと検討課題の析出が中心となった。2年目の本年度は、テーマに関連性のある科研費萌芽研究¹と調査を大幅に重複させることとなった。この萌芽研究のテーマは「里山研究」だが、2年目に入って庭や公園を「擬似里山」と見なすという見通しが鮮明になりつつある。言い換えれば、「人の手によって作り変えられ維持されている“里山”」と、「人の手によって創造され維持されている“庭”」との共通点と相違点を探るということである。その結果、萌芽研究徒と本プロジェクト研究のテーマが重複することになった。ただし調査や議論の立脚点は、園芸文化史や社会史ではなく、むしろ生態学や環境社会学ということになる。

具体的には、今年度は主として次の3点の個別問題についての調査と検討が行われた。(1)ガートルード・ジークルの庭園設計の特徴、(2)熱帯様式の庭園における赤や黄色の葉物の多用、そして(3)ヒンズー教圏の花弁を大量に消費する文化である。このうち(2)と(3)の問題については、機会をあらためて報告することにしたい。

本稿では(1)の問題について報告するが、ほとんどはガートルード・ジークル²の『フラワー・ガーデンのための色彩設計(仮題)』(1914年：以下で

は『色彩設計』と略記)³をめぐるとなる。その理由は、現在、『色彩設計』の集中的な検討と翻訳作業が進められているからである。

『色彩設計』の翻訳と検討は、恵泉園芸短大の舎監だった土屋昌子さん(現在、学園史料室)が個人的に進めてきたものである。昨年(2019)の春ごろに園芸文化研究所の箱田所長と新妻に相談があり、秋から園芸文化研究所の勉強会という形式で議論しながら、邦訳原稿の検討と仕上げ作業が進められている。この勉強会については土屋さんが別に報告し、そのなかでジークルの業績と本書の意義が議論されるので、そちらも参照されたい(86ページ)。土屋さんの報告と内容が重複する可能性を意識しつつ、ここでは私なりにいくつかの問題点について予備的な考察を述べ、今後の課題として提起することにする。

はじめに

ジークルは19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍し、今日の日本で「イングリッシュ・ガーデン」と呼ばれている庭園様式の確立に主要な寄与をした人物とされる。彼女の名前の表記を、昨年度のプロジェクト報告⁴では「ジキル」とし、脚注で「ジェキル」のほうが原音に近いだろうと指摘した。英語辞書などの発音記号から考えれば、「ジーキル」ないし「ジェキル」の表記が妥当だろう。しかし、彼女の最初の著書『森と庭』(1899年)の1983年版⁵に付された序文によれば、母親や兄弟姉妹間では「名前を”treacle”〔糖蜜〕と韻を踏んで発音」していたという。したがって本人の発音をカタカナ表記すれば「ジークル」となる。

まず指摘しておけば、この一冊の検討だけでジーキルの主張や庭園様式について結論をいそぐことはできない。第一に、彼女が書き残した著書やエッセイは膨大な数があり、まだごく一部にしか目を通していないからである。またそれ以上に、「アマチュアの実践家(労働者：a worker)」であることを、彼女自身が繰り返し強調しているからである。この言葉は「旧弊から抜けられないプロの職業庭師」に対する批判であると同時に、理屈ばかりの理論家への批判でもあるだろう。じっさい、彼女は体系的な理論は書

き残していないようだ。しかし、彼女とその庭についての研究は少なくなく、それらを参照しつつ本書を通読したとき、彼女が庭園様式になした貢献をいくつか指摘することができる。

昨年度のプロジェクト報告⁶では、ジークルを、彼女を見出したロビンソン⁷と合わせて議論するなかで、彼女たちより以前の時代の庭園にくらべ規模が小さく、それに対応して造園のための労働力も費用も少なくて済むこと、したがって専門の造園師に依頼せず個人が手造りで庭をもてるということを指摘した。規模が小さく造園費用が低額な中産階級向けの庭は、すでに19世紀前半にラウドンが主張していた⁸ことなので、最後のプロの造園師に依頼せず個人が手造りする庭という点が、今日のガーデニングへの道を開いたジークルたちのもっとも重要な功績ということになる。

本年度における『色彩設計』の検討から、彼女が庭園様式になした貢献として、さらに以下の三点を指摘することができる。①「ボーダー」(“border”)と呼ばれる花壇様式の確立、②「ドリフト」(“drift”)という植栽デザインの導入、③色彩学の庭への応用である。またもう一点、今後の最重要検討課題として、④ジークルの庭における「ウッドランド(森林)」の意味についても指摘しておきたい。

「ボーダー」の起源とジークルの新しさ

「ボーダー」花壇の特徴はとても細長いことだが、奥に背の高い植物、手前に近づくにしたがって低い植物を配置することに着目すれば、立体的な形式の花壇という点こそが最大の特徴といえる。背後に常緑の低木などを並べて植栽するなどし、それを背景として四季の草花が鑑賞される。

「ボーダー」の源流となった発想は、ふたつあると考えられる。ひとつは、日本の里山のような田園地帯(“countryside”)の「明るい林縁の風景を模す」という発想で、昨年度の報告で述べたロビンソン、とくに彼の「ワイルド・ガーデン」⁹理論の強い影響があるだろう。林を背景とし林縁から野原へと広がっていく風景を、数メートル幅の細長い花壇で再現するわけである。当時の絵画¹⁰を見ると、林の手前に広がる野原で草花を摘む少女を描いた

絵が多い(今日でも、多くの人が好ましく感じる風景だ)。このような絵と「ボーダー」の共通点と相違点を分析していく必要性があるだろう。

「ボーダー」の源流となったもうひとつの発想は、いわば「古民家保存」運動との関係である。昨年度の報告の主な参考文献であったヘルムレイヒ¹¹は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての庭園様式の成立過程に、当時の「ナショナル・アイデンティティー」を求める時代精神が強く影響していたことを指摘した。昨年度の報告では触れなかったが、ヘルムレイヒはこの議論の主要な拠り所として、消滅しつつあった「民家(cottage)」の保存運動や復元運動を詳細に分析した¹²。日本の「古民家保存」の動きと似ていると考えていいのだろう。ロビンソンも同時期に、「ボーダー」などに植える植物として外国産の花よりも農家の庭に植えられていた草花(とくに宿根草)を奨励していた。

当時の英国の民家が描かれた絵などを見てみると、日本の農家でも同じだが、住居の背後には林があって背景となり、建物の裏手などに自家消費用の菜園がある(生産用の農耕地は離れているので見えない)。このような民家のどこに草花が植えられているかという点、菜園の一角にも植えられているが、ほとんどの場合、民家の南側の建物の壁に接する部分、あるいは民家の敷地を囲む低い塀沿い、つまり壁や塀と通路のあいだの細長い地面である。このような場所に草花を植えるとしたら、壁際につる植物や草丈の高い植物、手前に低い植物となるのは自然だろう。もっとも手前の通路沿いには、歩行に邪魔にならないごく低い植物が植えられている。

この民家の壁際の小さくて狭い花壇は、その立体的な構造といい構成種といい、ロビンソンやジークルがいう「ボーダー」そのものといえるだろう。壁を這い登るつる植物が背景となって、その手前に草花が植えられている。また少し離れた距離から民家を眺めれば、裏の林を背景として民家を配し、「ボーダー」を焦点とする庭として見ることができるだろう(いわば「農村の風景を模した庭」であり、これは前段で指摘した「明るい林縁の風景を模した庭」と同一ということができそう)。当時の民家を描いた絵には、このような構図の絵が数多く見られる。

ジークルの場合には、この壁を民家など建物から切り離して庭の中央に配置し、その壁に沿って長大な「ボーダー」を作った点に、彼女の革新性があったといえそうだ。庭のなかの壁など構造物を設計したのは、庭園設計の相棒であった若い建築家ラッチェンス¹³である。壁を独立させ、ただ「ボーダー」の背景にするという目的のために設置するという発想が、二人のうちのどちらのものだったのかは今後の検討課題としたい。またこの発想がこの二人以前からあったのかどうか、またまったく別の発想から壁が庭の中央に置かれた可能性も検討しなければならない。

同じことを別の角度から考えてみると、ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」¹⁴が、あくまでも現実の森林の一角に作られた、つまり林縁に「作り込まれた」のに対して、ジークルはそれを林縁から切り取って庭のなかに持ち込んだといえるかもしれない¹⁵。したがってジークルの「ボーダー」には背景の林がない。そこで、常緑の低木などを並べて植栽し、あるいは壁につる植物をからめて背景を作らねばならないことになる。森林から切り離されて自由になった「ボーダー」は、地面と太陽さえあればどこにでも作ることができるようになった——都会のなかの小さな地面でも可能だろう。

ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」は、所有地のなかに森林や小川のある人々(中流上層階級)を対象にしていたと考えられる。大土地所有者の独占物だった風景式庭園を、規模を縮小するだけでなく、手間のかからない宿根草などを植え込むなど個人でも庭造りができるための工夫を加えて、中小土地所有者に提案したのが「ワイルド・ガーデン」だったといえるのかもしれない。だとすればジークルの「ボーダー」は、背景となる森などの景観から分離されたという特徴を重視するならば、結果として、庭を土地所有者の独占から解放したといえるだろう——本人がそのことを意識していたかどうかは、今後の検討課題としたい。

庭を見る視線、絵画を鑑賞する視線

ここで一点、「ボーダー」について議論すべきと思われる問題点を指摘しておきたい。「ボーダー」の構造が立体的であり、またかならず背景が作ら

れることを考えたとき、いわゆる花壇を私たちが鑑賞するときの「視線」に注目する必要があるということである。

安西信一¹⁶は風景式庭園の成立を議論するなかで、彼が「閉ざされた庭」と呼ぶ囲われた庭が、外部世界から閉ざされているだけでなく、神や徳という高次の次元に垂直に向けられ、それを介在することによって外部世界とつながっていると論じた。他方、英国で発達した「風景式庭園」は「開かれた庭」であり、世俗化され水平化されているという。

安西の論点を借用するなら、大陸ヨーロッパから英国に導入された整形式庭園の「花壇(“Bed”)」のデザインは、天から見下ろす神の視線に向けられている。そのような庭園の所有者である領主や貴族はもちろん人間であり、大邸宅の二階か三階のベランダから庭を見下ろすようにして幾何学模様を鑑賞し、またその向こうに広がる広大な領土の風景を堪能したのだろう。地面に下りて、そのような花壇の周辺を散策したとき、幾何学模様に植栽されたツゲの枠のなかに植えられた草花はどのように見えるのか——たぶんあまりよくは見えないのではないか？¹⁷

「風景式庭園」の場合は、囲いを取り払って周囲の自然や田園風景に自然に広がっていくように設計されている。したがって視線も、当然ながら、水平にどこまでも広がっていく。そのような庭の所有者の意識のなかでは、天上の神の存在と自己の所有地との相対的な重要度に大きな変化があっただろう。大航海時代はすでにはるかな過去であり、世界地図がほぼ完成して植民地経営が軌道に乗りはじめた時代である。いわば地理的な思考と地理的な視線が形成された時代といえるのかもしれない。この点については英文学者の故・川崎寿彦¹⁸が、当時の「眺望詩」の分析などによる重要な議論と指摘を残している。

それに対して「ボーダー」の場合には、立体的かつ細長く作られ、それに沿って通路が配置されるという特徴がある。したがって鑑賞者の視線は、真横に向けられだろう。そして壁と植え込みを背景にして草丈の順に植えられた草花を、視線をゆっくりと上下に、また左右に動かしながら眺めていくことになる。この視線の方向と動かし方は、私たちが公園の花壇など

を眺めるときの視線と同じではない。また整形式庭園の幾何学模様を見下ろす視線とも、風景式庭園の水平線への無限の広がりを見望する視線とも、まったくちがう。

「ボーダー」を鑑賞するときの視線は、たぶん、室内の壁にかけられた絵画を鑑賞するときの視線と同一である。ジークルは「ボーダー」について、しばしば「生きている植物で絵を描くことです」¹⁹と述べている。

これに対して、「ボーダー」沿いの通路を散策しながら鑑賞する場合を考えると、花に向けられた視線は、同時に、これから向かう方向にも向けられるだろう。『色彩設計』から判断するかぎり、このような視線の先がどうあるべきかが認識され、それにあわせてパーゴラなどが配置されるなどして、その「ボーダー」を含む庭の全体がたくみに設計されているようだ。ジークルは理論的な説明をしていないが、風景式庭園の理論の重要なポイントである「焦点(フォーカル・ポイント)」と「通景軸(ヴィスタ)」をはっきりと認識していると思われる。ただし、風景式庭園への視線を強く裏打ちしている領土や国土といった地理的な広がり概念は、ジークルの庭にはあまり縁がないように思われる。彼女の視線は、「風景」そのものではなく「風景画」を鑑賞するときの視線と同じだと考えればいいのだろう。

「ドリフト」という植栽方法の意味

「ドリフト(流れ: drift)」というジークルが考案した(と考えられる)植栽方法は、何種類もの草花を植えるとき、種類ごとに丸や四角に近い形にまとめ植えるのではなく、左右に流れるように伸びる形のまとまりにする方法である。一般的に見られるような、四角い区画に区切り、それぞれの区画ごとにちがう種類をまとめていくやり方を彼女は批判し、それに対置させて「ドリフト」を提案している²⁰。

ドリフトの利点として彼女は、花期が終わった草花や季節が終わって枯れた植物、あるいは枯れた後の地面といった見苦しい部分を、手前の植物のドリフトが隠してくれることを指摘する。「ボーダー」が立体構造でなければ、この効果はのぞめないだろう。土手の斜面に作られた「早咲き宿根

草のボーダー」(『色彩設計』第1章)は、常緑のシダを肉太な「ドリフト」にしていくつも配置し、そのあいだに何種類もの宿根草が植え込まれている。このようにすれば、花のない季節にもシダの緑を楽しめるとジーキルは指摘する。この場合は、高低差のある土手の斜面という立体構造が効果を高めている。

色彩学の庭への応用

色彩学をジーキルが庭に応用したことは、彼女がもともと美術学校で学んだ画家であったことを考えるなら、自然ともいえる。彼女は「植物を絵の具にして絵を描く」という姿勢を明確にしめし、またそれによって彼女の庭園設計様式を完成させた。彼女の『色彩設計』(1914年)は、その集大成とされている。

彼女が参照した色彩学がどのようなものだったのかは、きわめて重要な課題であろう。美術学校時代に学んだ風景画家J. M. W. ターナーの色彩論の影響を重視する意見もある²¹。またジョン・ラスキンの近代絵画論も無視できないだろうし、ウィリアム・モリスが主導する「アート・アンド・クラフト運動」との関係も検討せねばならないだろう。フランスの化学者シュブルール²²の色彩学の影響もしばしば指摘されてきた²³。

ここではシュブールの色彩学に関連して、何点かの問題について予備的な考察を述べるにとどめたい。シュブールの色彩学の著書には、『色彩調和と色彩対比の原理』(1839年)²⁴と『色相對比の法則とその応用』(1854年)があり、前者は英訳が1854年に刊行された。ジーキルが美術学校に入学したのは1861年、17歳か18歳のときであり、この英訳本に出会っていたであろうことは想像にかたくない。

手元の事典類を見てみると、シュブルールは色彩学者ではなく有機化学者である。たとえば平凡社の『大百科事典』では、彼の色彩学にまったく触れられてない。パリの自然史博物館の化学教授であり、脂肪がグリセリンと脂肪酸の化合物であることを発見して石鹼やロウソクの製造など化学工業の発展に貢献した。またゴブラン綴織製造所の染色監督官をつとめ、『世

界科学者事典』²⁵では、単色の斑点を刺繍やタペストリーのように密集させて描くと連続的な色彩の変化が幻視されることに興味をもち、その研究が後に印象派の点描画法に影響をあたえたことが、シュブールの項目の末尾で指摘されてはいる。

しかし、色彩学ではシュブールの色彩調和論や色彩を定量的に扱う方法がよく知られているようで、ウェブで検索してみると色彩検定試験でもよく出題されているようだ。また彼の色彩理論は、マネやモネなどフランスの印象派や、とくに19世紀末の新印象派の画家たちに影響をあたえたことがよく知られている。モネが庭造りにも専念していたことは、たぶん当時にもよく知られていただろう。モネ(1840～1926年)とジークル(1843～1932年)は完全な同時代人であり、モネの絵と庭のことを彼女がどれだけ意識していたか興味をそそられる。

ただし、ジークルにしてもモネにしても芸術家であり、シュブールの色彩学であれ他のことであれ、科学的な根拠をどれほど重視していたかは別問題だろう。たとえばモネなど印象派の第一世代は直感的、経験的に点描画法を工夫したのに対して、次世代のスーラなど新印象派は科学に基盤をおき科学的理論を意識的に点描画法に応用したとされている。新印象派に対する評価は、一般的に言って、前世代の印象派に比べて低いことは確かなようだ。芸術においては、科学や理論よりも直感や経験のほうが重要なのだろう。

ジークルの場合においても、科学的な理論より経験と直感が重要だったと思われる。たとえば先に引用した「植物で絵画を描く」という言葉の前後でジークルは、「訓練された目には、なにをしてあげるべきかがわかり、訓練された手がそれをする。どちらも獲得された本能によってです」と述べている。「訓練」＝「経験」によって「獲得された本能」にとって、科学的な理論はあまり重要ではないだろう。この点において対照的なのが、ジークルに影響をあたえたロビンソンである。彼のガーデニング理論は、ダーウィン進化学など当時の最新の科学理論を積極的に応用したものであった。ウィルソンのガーデニング理論については、今後の最重要課題のひとつとしたい。

シュブルール色彩学をガーデニングに応用することの是非について、19世紀の半ばから論争があったという²⁶。ヴィクトリア朝初期には色彩の強いコントラストをよしとする庭師が主流派だった。一部の少数派がシュブールの補色理論の採用を提案し、その指導者であった植物学者リンドリー (John Lindley: 1799-1865) は、自らが編集する週刊園芸新聞『ガーデナーズ・クロニクル』で次のように主張した²⁷。「さて、赤の補色は緑であり、オレンジのそれはスカイ・ブルー、黄のそれはヴァイオレット、インディゴのそれはオレンジ・イエローなのだから、したがって青い花とオレンジ色の花を、黄色の花とヴァイオレット色の花を並べるとよく、一方、赤やローズ色の花は自分自身の緑色の葉と調和している。色が一致しないときには、どんな場合でも、あいだに白を置くと効果が修復される」。

この記事に対して、サフォーク州の「シュラブランド・パーク」の主任庭師ビートン²⁸が、ライバル週刊園芸新聞『コテージ・ガーデナー』のコラム欄でリンドリー批判を展開した。反論の主旨は、純正な花壇では植物の葉をそのまま生かしているのだから、花と花とが補色効果を生むほど近づくことはありえないということらしい。

この論争は1856～57年に公開の場で大詰めを迎え、チズウィックとハンプトンコートが花壇に補色理論を、キューとクリスタル・パレスがビートンの監督のもと標準的なコントラスト理論を採用し、結局はビートンが勝利した——植物学者リンドリーの科学的な理論が、庭師ビートンの経験と直感に屈したといえよいかもかもしれない。チズウィックもハンプトンコートも補色による設計を放棄し、リンドリーは『ガーデナーズ・クロニクル』紙でシュブール批判を開始したという。勝ち誇ったビートンがリンドリーを揶揄するコラムを書いたことは、いうまでもないだろう。

しかし1860年代には、新世代の庭師たちが強烈なコントラストの使用に対して批判を開始し、やがて「レッド・ホット〔過激〕でない色彩の使い手」という言い方が褒め言葉となったという。1863年にはRHS事務局長補佐だったマレー²⁹が、「旧学派の一人」という仮名で激しい批判を展開した。黎明期の人類学³⁰の言葉を借用して、派手な色彩は未開人の好みであ

り、文明化した自分たちに派手な色彩を喜ぶ風潮があるのは原始的で野蛮な好みの名残だろう——だが自分たちは文明化の階段を着実にのぼりつつあり、このような好みという弱点は退化しつつある、というのである。

1871年にはロビンソンが週刊園芸新聞『ザ・ガーデン』を発刊し、色彩の問題を含め旧来の形式主義的な花壇に対する批判を展開していく。いずれにせよ、ジークルを見出したのはロビンソンだった。その意味においてだけでも、ジークルへのロビンソンの影響は無視できない。ジークルは1882年に「フラワー・ガーデンにおける色彩」という文章を『ザ・ガーデン』に寄稿し、同題の長いエッセイがロビンソンの不朽の名著『イングリッシュ・フラワー・ガーデン』(1883年)の1章として収録された(末尾の署名は「G.J.」)。1908年には9作目の著書として、やはり同題の『フラワー・ガーデンにおける色彩』が出版され、その増補改定版がいま勉強中の『色彩設計』(1914年)である。

ジークルの色彩論はいままさに勉強中であり、ここでこれ以上に述べる必要はないだろう。またロビンソンの色彩論を含むガーデニング理論については、ジークルの研究のめどがある程度ついてからの課題としておきたい。

以上のシェルブールに関する概観に関連して、J. C. ラウドン(1783-1843)の妻ジェーン・ラウドン³¹による夫の伝記³²に興味深いことが書かれている。1805年つまり夫が23歳という早い時期の日誌に書かれているフラワー・ガーデンの色彩の調和についての記述が、シェブールールの色彩学にきわめてよく一致しているというのである。すなわち、「混色(compound colour)の花は、単色(single colour)の隣に置くと美しく、そして「単色は青と赤と黄色の三色しかない」のだから、「青と赤からなる紫の花のとなりには黄色の花」を置くべき、「オレンジの花は赤と黄色からなるのだから、青と対比させるべき」、「緑の花は青と黄色からなるのだから、赤と交替させなければならない」。このことを「三部分があってはじめて一つの完全な全体となるという原理にもとづいて説明」し、「三原色の調和を、音楽の和音に比較した」という。

シェブールールの色彩学の著書が刊行される34年前の日誌であり、また

少なくともこの伝記が書かれた1845年には、すでに英国でシェブブルールの色彩学がよく知られていたことが、このジェーン・ラウドンの記述から確認できる。

「ウッドランド」の意味

さきにボーダーの起源を議論したなかで、田園地帯(カントリーサイド)の風景(景観)における背景としての森林の意味に触れた。『色彩設計』の舞台であるマンステッド・ウッドの敷地の一角にも森林(ウッドランド)があり、1章をあてて詳しく紹介されている。しかしこの1章だけでは、マンステッド・ウッド全体のなかでのこの森林の位置づけがよく見えてこない。ジーキルの発想であれば、森林と他の庭との関係はかなり意識され工夫されていると考えられる。また生態学や環境社会学に立脚点を置こうとする私の立場からすれば、森林との関係、森林の位置づけは、もっとも重要で避けて通るわけにいかない課題である。

ジーキルの1冊目の著作『森と庭(ウッド・アンド・ガーデン)』³³は、マンステッドウッドの庭造りをはじめたばかりの時期の記録であり、庭の部分よりも先にまず森林に手を加えていった過程が、かなり詳細に述べられている。また森で作業する男たち(庭師ではなく近隣の村人のようだ)の仕事ぶりや、当時の農村地帯の人々の森への手入れの仕方やマイナー・サブシステムの利用の仕方も紹介されている。

この問題の検討は、今後の最重要課題として指摘しておくにとどめる。

参考文献

- 1 本研究には園芸文化研究所の2005年度研究助成のほか、次の科研費の一部もあてた。科学研究費萌芽研究「都市近郊の里山の保全と活用に関する総合的研究」(代表者:新妻昭夫、課題番号:16651015)。
- 2 Gertrude Jekyll (1843-1932).
- 3 Jekyll, G., 1914. *Colour Schemes for the Flower Garden*. Country Life (London).
- 4 『園芸文化』第2号(2005年):113-117。
- 5 G. Jekyll, 1983(1899). *Wood and Garden*. Introduced and Revised by Graham Stuart Thomas. The Year Company (Salem, New Hampshire).
- 6 上の注3を参照。
- 7 William Robinson (1838-1935).
- 8 John Claudius Loudon (1783-1843)については、一昨年度一般研究助成報告(『園芸文化』第1号:80-85ページ)、および昨年度のプロジェクト報告(上の注4)を参照されたい。ラウドンによる新興の中産階級向け郊外住宅の庭の提案について、おそらくもっとも重要な文献はLoudon, J. C., 1836. *The Suburban Gardener and Villa Companion*. であろう。またアン・スコット=ジェイムズ(横山正訳)『庭の楽しみ——西洋の庭園二千年』(1998年、鹿島出版会)の第9章も参照。
- 9 Robinson, W., 1870. *The Wild Garden or, Our Groves & Shrubberies Made Beautiful*. John Murray (London).
- 10 いま手元で参照しているのは、たとえば次の本である:Lewis, C. (ed.), 1984. *Making of a Garden: A Gertrude Jekyll Anthology*. Garden Art Press (a Division of Antique Collectors' Club).
- 11 Helmreich, A., 2002. *The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914*. Cambridge Univ. Press.
- 12 ウィリアム・モリスが1877年に「古建築保護協会(The Society for the Protection of Ancient Buildings)」を創設したことは、記憶しておいていだろう。
- 13 Sir Edwin Lutyens (1869-1944)。1889年、20歳のときにジークルと出会い、

マンステッドウッドのジークルの家の設計と建築を担当する。その後、1920年前後までに100個所以上の庭を共同制作した。ジークルの墓のデザインもラッチェンスによる。

- 14 『ワイルド・ガーデン』については、上の注9参照。ただしこの本はまだ入手していません、ヘルムレイヒ(上の注11参照)での引用を間接的に参照したにとどまっています。
- 15 この貢献がジークルのものなのか、あるいは以前から議論され実践されていたことなのかは、今後の検討課題である。とくにロビンソンの『イングリッシュ・フラワー・ガーデン』(Robinson, W., 1883. *The English Flower Garden*. John Murray)の分析は欠かせないだろう。
- 16 安西信一(2000年)『イギリス風景式庭園の美学: <開かれた庭園>のパラドックス』。東京大学出版。31-33ページ。とりわけ図表1・AとBは示唆に富む。
- 17 『RHS200年史』の、19世紀半ばにはじまる「ベッド」から「ボーダー」というデザイン様式の変化と論争についての記述を参照(270-271ページ)。この論争の最後の主人公は、いうまでもなくジークルである。また興味深いことに、「公園の花壇」だけは別物だったらしく、今日でも見慣れた光景である。Elliot, B., 2004. *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*. Chichester: Phillimore & Co.
- 18 川崎寿彦(1983年)『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』。名古屋大学出版会(2002年、新装版第二刷)。
- 19 たとえば、『森と庭』(1983年版:注5参照)の212ページ。
- 20 『色彩設計』の最終章(第18章)の「ヒース・ガーデン」の例が、「ドリフト」の主張の典型と考えられる。
- 21 たとえば『色彩設計』(1982年版)の、T. H. D. Turnerによる巻頭解説は、ターナーの影響を重視し、印象派との関係については否定的である。Jekyll, G., 1982 (1914). *Colour Schemes in the Flower Garden*. Antique Collector's Club Ltd.
- 22 Michel-Eugene Chevreul (1876-1889). フランスの有機化学者。

- 23 たとえば、宮前保子『“イングリッシュガーデン”の源流——ミス・ジークルの花の庭』2001年、学芸出版社)がある。
- 24 M. Chevreul, 1839. *Dela Loi du Contraste simultane des Couleurs*.
- 25 D・アボット編(伊東俊太郎監訳)『世界科学者事典 第2巻:化学者』1986年、原書房。
- 26 以下の記述は次の『RHS200年史:1804-2004』の270-271ページによる(上の注12参照)。
- 27 掲載号は明記されていないが、1855年前後だろうと考えられる。
- 28 Donald Beaton (1802-63).
- 29 Andrew Murray (1812-78)。法律家で、甲虫学とくに農業害虫の専門家として業績を残した。植物学とくに針葉樹の研究でも知られ、1860年から65年までRHSの事務局長補佐をつとめた。
- 30 ロンドン人類学会の設立は、マレーの匿名記事が書かれたと同じ1863年。
- 31 Jane (Webb) Loudon (1807-58)については、一昨年度の一般研究助成報告(上の注8)を参照。
- 32 Loudon, Jane., 1845. A Short Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon. Rep. in John Gloag, 1970. *Mr. Loudon's England: The Life and Work of John Cladius Loudon and His Influence on Architecture and Furniture Design*. Oriel Press, New Castle upon Tyne. この伝記は次の本の付録として発表された——Loudon, J. C., 1845. *Self-Instruction for Gardeners, Foresters, Bailiffs, Land-Stewards, and Farmers*. (written by his wife, and with memoir by her). 刊行はジョン・クラディウス・ラウドンが他界して二年後であり、現本はまだ見えていないが、おそらく残されていた原稿に妻ジェーンが加筆して刊行されたと考えられる。
- 33 注5を参照。